

ほとけの混和会だより

平成三十年六月

東光院

仏の混和会

第133号

心の藏無限の可能性



心の藏 無意識界

釈尊の御教えに「アラヤシキ」と言う教えがあります。「アラヤシキ」とはインドの言葉ですが、私は「心の藏」と解釈しております。

私達人類は生命誕生以来、何千年何万年と言う長い間、命も心も継承されて参りました。その間に得た事、たとえば人々を慈しむ事の喜び、又厳しい環境下に於いて力強く生き抜く智慧など様々な潜在能力が私達の心の中に蓄積されて今があります。

しかし日頃己の心を「意識」して活動するのは氷山の一角、ほとんどが「無意識」の中に眠っているのが現実です。ですから無意識の世界には無限の可能性が秘められているのです。この「無意識」の存在を立証

するすばらしい出来事をテレビで放映しております。それは岡山県の中さき町が突き止めた凍結解凍覚醒法」と言うバナナの栽培方法に於いたのです。



バナナの栽培方法

バナナの原種は氷河期以前から存在していた元々過酷な環境下でも生き抜く力強い潜在能力を持って居る。

しかし昨今のバナナは熱帯地方に過剰して存在している。過ぎない、ならば過酷な環境下でも生き抜く潜在能力を目覚めさせれば、日本のような寒冷地でもバナナの栽培が出来るのではなからうかと言う思いから、バナナの苗木を凍結させて寒冷地でも生き抜くバナナ本来の潜在能力を目覚めさせたと言うのが驚きです。

私達人類はバナナと同じように熱帯地方に順応して生きて居るのか本来の生き方を忘れて生きて居るのか、どちらにしろ私達の心の藏の中には無限の可能性が眠っているようです。又今の思いや善行の功德は人々の心の藏に蓄積されて来世へと引き継がれて行くのです。

カンダタは己自身



ある日 阿弥陀様は、極楽浄土の蓮池を散策しておられた。

その蓮池の真下には地獄が有り、澄んだ池の蓮のすまみからは苦しみが亡者の姿が在り在りと映し出されていきました。その亡者の中に極悪非道を重ねたカンダタも他の亡者と同じように血の海に浮いたり沈んだり、そして針の山に何度も突き落とされながら苦しみがいておりました。

しかしこのカンダタ、たった一つだけ良いことをしておりました。それは目の前に洗われた蜘蛛が一瞬踏みつけてやろうと思つたが蜘蛛にも尊い命を宿している、たすけてやろうと踏みつづすことをどめたのでした。

その時の様子を思い出した阿弥陀様はカンダタの目の前に蜘蛛の糸を垂らしてあげたのです。突然極楽の蓮池から垂れてきた蜘蛛の糸にカンダタは大喜び、「した、これを登ってはいけば極楽に行ける」と思い細い細い糸を手につけて登り始めたのでした。すると、沢山の亡者がカンダタの後を追って細い糸をよじ登ってくるのです。カンダタは「ここに切れるのぞい、コラー降りろ、この糸は俺の者だ、降りろ」と怒鳴つた瞬間にカンダタの目の前で蜘蛛

の糸は「フツリ」と切れカンダタは地獄の底に落ちていったのでした。

これはだれでも知っている芥川龍之介の蜘蛛の糸と言うお話です。「何故蜘蛛の糸は切れたのか」これが今回の課題なのですが普通の蜘蛛の糸でしたら一人ですら支えることは出来ませんが、阿弥陀様は何人ぶら下がっても切れないようにしてあったのです。

しかし、カンダタは己だけ幸に成る事しか思っていなかったのです。他の幸を願う思いはひとつからも無かったのです。ですから思わず「コラー降りろ、この糸は俺のものだ」と叫んでしまつたのでした。すると蜘蛛の糸はカンダタの目の前でフツリと切れてしまつたのでした。

これは架空のお話ですが現実問題として、又己の事ばかりで神妙にお話ししたいと思います。もしカンダタが、「オーイ気をつけて上がって来いよ、皆一緒に幸せの境地に行こうぜ」と声を掛けたら阿弥陀様ははたして糸を切つたであろうか、たぶん切らなかつたお話しです。

そこでこのお話を己のことに受け止めて、己自身が地獄に落ちないように、人と人、共に理解し合い、共に他の幸を念じる環境と成るように努めて参りたいと存じます。亮観拝



日本仏教に登場する仏様を、番号少しずつご紹介。今回は如来部の普賢菩薩を紹介いたします。



京都府 岩舟寺
普賢菩薩騎象馬

● 如来部 普賢菩薩

普賢菩薩は文殊菩薩と共にお釈迦様をサポートとされている仏様。普賢とは「全てに渡って賢い」という意味があり、仏道修行をする者を守護する役割とされています。また、普賢菩薩は法華経というお経を信仰する者も護るとされており、この法華経には女性の救済についても説かれていることから、平安時代ごろの女性から多く信仰を集めておりました。

そんな修行と法華経を信仰する者を守る事から、比叡山延暦寺の法華堂(別名・にない堂)という法華経の修行をするお堂には普賢菩薩が祀られて降ります。

この普賢菩薩の特徴は、なんととっても六本の牙を持つ白い象に乗っている姿。お釈迦様が生まれる前に、母親の夢の中に現れたとされる象も同

じく六本の牙の生えた白い象とされており。

象は昔からインドでは清らかで偉大な存在とされているため、仏教においても同じように考えられており、修行者を災いから守護する姿を象で表わされています。

また、普賢菩薩には時代と共に変化した姿があり、そちらの名を**普賢延命菩薩**と言います。

こちらは普賢菩薩が金剛薩(た、は土偏に垂)と言う仏が合体し、生まれました。一緒になった「金剛」とはダイヤモンドの事であり、そこから「何者によっても妨げられない命」の意味に結びつき、延命祈願を叶える仏様とされました。一説によると平安時代、宮廷に使える僧侶が天皇の延命祈願のため、天皇守護本尊として祀られていた言われております。

普賢菩薩と普賢延命菩薩の姿を見比べると、腕の数も下にいる白象の頭数も増えており、いかにも「合体してパワーアップしています」と言うのが一目瞭然ですね。



大分県 大山寺
普賢延命菩薩座像

深大寺本堂再建百周年



春の観光シーズンを迎え、深大寺では連日大勢の方がお見えになりました。連休中には、慶応の大火によって消失した本堂が再建

百年の節目を迎えたことを祈念して特別展が開かれました。深大寺では本堂や書院、中庭等の中心建築物の一般拝観は原則行っておりません。今回のように不定期でテーマを設け拝観展示を行う場合がありますので、その際は是非お越しにならってみてはいかがでしょうか。



花祭りを行いました

お釈迦様の誕生日、花祭りが今年も四月八日に行われました。花祭りは正式には灌仏会(かんぶつえ)といひ、松尾芭蕉の俳句にも登場します。「灌仏や 嫩(しむ)手あはする 数珠の音」・私たちが生まれるずつと

前、暖かい春の日差しのもと、どこか田舎のお寺に設けられた誕生仏にご老人が甘茶を注ぎ、手を合わせる様子が浮かび上がってきます。お釈迦様が降誕された際、天から甘い雨が降り灌(そそ)ぎ身を洗い清められたという事例にちなみ、天上天下を指した誕生仏に甘茶を注ぐ風習が広まりました。時代とともに消えてしまふ文化もありますが、今となっては寺院であっても花祭りを行わないケースが多くなってきました。参加

されたお子様が親になったとき、手を合わせていただいたその記憶を次の世代に語り継いでいただければ幸いです。



また、当日 運営や配役にあたっていただきました皆様には心より感謝申しあげます。 亮敬拝

茶会が開かれました

三月十八日、五十嵐先生と社中の皆様により、お茶のご接待がございました。春の訪れの中に心落ち着くひとときを味わうことが出来ました